

学びたい時が、学びの時

【プロフィール】

東京大学文学部卒業後、銀行員、専業主婦を経て、東京大学教育学部へ学士入学。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学）。東京大学教育学部助手、立教大学文学部助教授、東京大学大学院教育学研究科長を経て、東京大学名誉教授、2021年度より現職。



学習院大学 教授 ^{あきた}秋田 ^{きよみ}喜代美

埼玉教育第5号の特集である「家庭・地域の教育力の向上と生涯にわたる学びの支援」について、学習院大学の秋田喜代美教授にオンラインでお話を伺いました。

—先生の御専門は教育心理学や授業研究ですが、これまでの研究や現在の問題意識について教えてください。

私の専門は、教育心理学の分野です。中でも、文章を理解するプロセスでテキストをどのように理解するかということが研究の始まりでした。「質問をする」「質問される」ということの効果などの研究です。いわゆる読解の研究をしていたので、実際に読むということを実験的に調べ、学校教育の国語や様々な教科で行われる「読む」ということを実際にどのように先生方が指導されているかを研究していました。その時、佐藤学先生からの紹介でいろいろな校内研修・授業研究に関わることができました。先生方の指導の熟達や、授業研究の在り方に関心を持って研究をさせていただいています。

2つ目としては、読むことの教育の推進活動の研究です。子供の読む環境をどう整えていくかという研究ですが、自治体の読書推進計画やサポートしている地域など、読みの発達を支える社会・文化的な活動ということについて研究しています。2000年の子ども読書年で様々なプロジェクトに関わったところから始まっています。

3つ目としては、小学校・中学校に訪問させていただくと、学びや生活に困難なお子さんに会うことも多くあり、乳幼児期の教育の大切さを痛感します。そのようなことから、乳幼児の保育所の研修とか、幼児教育の専門性に関すること、幼小連携について研究をしています。そのような研究から開発学校の委員をさせていただいたり、指導依頼を受け幼稚園や小学校を訪問したりしています。

最近関心のある研究としては、子供自身がどのように深く対象と関わって課題解決を協働的・探究的に

行っていくかということを研究しています。

特にここ10年ほど、OECD東北スクールや日本イノベーション教育ネットワークなど、学校単位で学ぶだけでなく、生徒主体で学校を超えて生徒同士がつながる学びということに関心があります。学校を超えて生徒同士がつながると様々な能力が発揮されます。学校の中での決まった役割を演じている生徒たちには、そこでは学校と違った学びがあります。それは違う学校の生徒が関わりあって、地域のことや自分たちの探究学習を語り合っ、他の学校はこんなに違うのかという発見や学びがあります。お互いに交流している時の高校生の意見は聞いていて非常に面白いです。生徒中心の学びの変革がどうあるのかという未来を感じます。

実践を追いかけっていると、面白いことが起こるので、皆さんと一緒に考えて行っているというところです。

—家庭・地域の教育力の向上が今回の特集の一つとなっています。特に地方創生という視点から学校を核として家庭や地域を巻き込んだよい取組について御紹介ください。

1つ目は、読書推進の取組についてです。子供は学校だけで本を読むという時間がなかなか十分にとれません。家庭で親が読んであげたり、逆に保護者が学校に読み聞かせに行ったりして、本以外のこともいろいろ語ってくれたり、図書館などの読み聞かせの取組もあります。学校と地域が読書推進で一つになる、つながっていくということは、まちづくりのはじまりとして重要であると思っています。乳児健診に絵本を手渡すというブックスタートという活動に私自身が関わらせていただいていたことが取り組むきっかけとなりました。

2つ目の例は、大分での美術教育の授業研究で、色に関しての取組です。姫島という島では、小学生や中学生がその地域の石を砕いて絵の具を作ったり、特産であるクルマエビの殻を焼いて炭を作り、絵を描いてみたりということをしていました。そこで私たちが驚いたのは、大人も知らないことを、子供たちが色を通

して発見していくということです。そして、島の保護者、お年寄りを含め、「こんな草からこんな色が出るのか」など一緒に驚きを共有するような活動が見られました。もう一つは、別府市の事例で色の探究です。別府は温泉が豊かで、血の池地獄などの温泉の色もいろいろあって、色は酸化鉄とか、弁柄（べんがら）とか、硫化鉄とかそういうものからできているということを小学校3年生の子供たちが探究していくわけです。子供たちは興味を持って生き生きと活動を行います。家に帰ってもお家の人にもう一度連れて行ってもらい活動を続ける子供が多くいたのです。「弁柄だ」とか「酸化鉄だ」とか言いながら、保護者にはよくわからない言葉を使いながら、夢中になって調べているのです。それを聞いた保護者がだんだんと色のことに関心を持つということがありました。保護者も巻き込まれて、温泉の色だけでなく、花の色や草の色、土の色など住んでいる地域の色へ関心が広がりました。他の教科と違って、どの子が「できる」「できない」や「上手」「下手」でなく、一人が一色、自分が作ったオリジナルの色を見つけていくので、そうしたことが、子供の自信にもつながり、地域への愛着につながっていきました。ふるさとの宝物を子供が探すことを通して、実は、子供こそ地域の宝物だと保護者や地域の人気が付いていくというプロセスが生まれていくことを目の当たりにしました。



【子供こそ地域の宝物だと保護者や地域の人気が付く】

3つ目は同様にイノベーションスクールネットワークにおいての高校生たちの探究の活動です。和歌山県の子供たちが渋柿を干し柿にする仕事を取材することによって、価値を見出していった活動や、過疎の地域でJRのコマーシャルを自分たちで考えて作り出す活動がありました。そこでは子供たちが、未来や社会の在り方を示してくれていると思いましたし、そこに触れることによって大人も、開かれていき、それが地方創生ではないかと感じているところです。

地方創生ということではいいますと、先ほどの大分の例ですが、別府の温泉の脇にいろいろな地獄の絵を子

供たちが描いて飾ったのですが、見てもらった人にコメントをもらうような活動になりました。すると、保護者や地域の人が地獄巡りに来るようになり、結果的に活気づいたという話がありました。「教育行政から地域振興」へ、縦割り行政ではあまり一体的に行われないことが子供を中心に展開されていました。私たちは「三方良し」と言っています。子供も、教師も、地域にとっても、良しということです。

―秋田先生は、一度銀行にお勤めになり、退職して子育てして、また大学に戻るという御経歴で、先生の生き方こそまさに生涯にわたる学びだと思われます。その経緯や研究者を志した動機についてお聞かせください。

高校は進学校で、私は予定調和的に大学に入ったわけです。大学に入るのがゴールになっていたので、大学に入ったら、何も目標がなくなっていました。教養中心で専門的なことがすぐに学べる大学ではなかったということもあって、意欲を失っていたのです。それまで遊ばないで学んできたのに、大学では授業に出ず、遊んでばかりいました。その当時東大は女子が少なかったのですが、その少ない女子の中でも3割しか結婚できないという話が、公然とされていたのです。私はその3割に入ることが目標になっていました。卒業したら9時から5時で仕事が終わるOLになりたいと思っていて、華やかな丸の内でもOLになろうと決めて銀行に入りました。銀行の中でも、研修課という部署に配属され、その中で女子は私一人だけでした。研修課なので、具体的に教育関係や教育方法、研修方法についての専門書を読むことが業務のひとつとなりました。そこで教育って面白いんだと思い始めたのです。やがて結婚しましたが、夫が転勤族でしたので、銀行を辞めて主婦になったのです。それまで銀行にいて、社会から評価されるということに関わっていた私が主婦になると、夫に「料理おいしいね」くらいしか評価してもらえないんです。評価されるということが社会にいる時と比べて格段に少なくなります。また、当時社宅に住んでいましたので、先輩ママから料理を教えてもらったり、お菓子作りを教えてもらったりして、楽しく過ごしていました。しかし、子育てに関しては、先輩のママの言うことに、「はてな？」と思うことが結構ありました。子供は運動させたほうがいいのか、しばらく泣かせておいたほうがいいのかという助言があったり、抱き癖がつくからだっこしないほうがいいのかという助言があったりしました。ちょっと不思議な気持ちもあり、子供の発達について正しい知識を学んでみたいと思ったのです。そこでもう一回教育学部の3年生に、子連れで入学しました。

だから、私は学びたくなった時が、一番学べる時期だと思います。今大学で大学院生や社会人の方などいろいろな方と接していますがその思いは一層強くなっています。エンジンがかからなければ人は学べないと思います。

たまたま素晴らしい指導教員に出会って、子育てしながらでも学べる環境があり、たまたま私が博士課程に入った時に別のコースに佐藤学先生が着任されました。それで、学校の授業ってこういうものなんだということをお教えいただき、研究の道へと進み始めました。読書とか読みの研究をやっているのなら、研究会をやっている三重県の石井順治先生のところに行ってみてはと言われて、そこで先生たちの魅力に惹かれ、そこから授業研究に入っていました。あとは、先生たちの必死に学ぶ姿やその面白さにはまっていったということです。

「学び続ける教師」とよく言われますけど、そんなことを外から言われたら、疲れてしまうから、休んだり、遊んだりできる教師でいてほしいと思います。学びたい時が学びの時なのですから。

ーコロナ禍において、学校現場もICT活用などで大きく変化しました。今後どのように学校教育が変化していくと予想されますか。また我々教職員は、どのようなことに気を付けていけばよいでしょうか。

GIGAスクール構想がコロナで、一気に進められているということがある意味で大きな変化だと思っています。しかしその直前に出されている学習指導要領で、「主体的・対話的で深い学び」ということこそが、学びの基本のスタンスであると思います。そのあとに出たGIGAスクール構想とか、個別最適の学びと、協働的な学びは、法令上決まっているものではないのです。学習指導要領を実現するための補完的な政策で出されたものです。「主体的・対話的な学びの時代から、これからは個別最適と協働です」というような誤解が、起こっているように思います。「個別最適は孤立化した学び」のように聞こえたり、「協働的な学びはペア学習とグループ学習ですね」となったりというような形式だけにとらわれているのではと危惧しています。

重要なことは、これからもICTありきではなくて、「主体的」になり「支えあう」ということが大切で、そこにICTが適切に入る形で使われることが必要であると思っています。よくICTは文房具といわれますが、単なる文房具ではなく、新たな道具を自分で創り出せる道具として活用してほしいです。創造をしたり、表現を自分で生み出したりすることができるということで、ほかの文房具と少し意味が違うと思います。それ

だけに、子供も先生も豊かに、クリエイティブにICTを使っていたきたいと思います。子供が学びの主体者になれるための道具であってほしいと思います。

ー秋田先生は昨年3月に、「物語る校長 ー新しい教育リーダーシップー」を牧田秀昭校長先生と一緒に上梓されました。これからの新しい教育のリーダーとして、校長に期待すること、希望することをぜひお聞かせください。

牧田先生とは、先生が福井大学教育学部附属中学校（現：義務教育学校）の研究主任になったところと一緒に学校創りをして本を書いたのが始まりです。附属中学校に来る前の牧田先生は指導が上手で、それなりに点数をとらせる先生だったそうですけれど、その先生が附属中で自分の授業スタイルを大きく変えるところに出会い、研究主任として、ミドルリーダーとして、どうやって教職員の皆を巻き込んでいくのかということと一緒に考えさせていただきました。自分一人ではなく、皆を巻き込みながら、皆のアイデアを入れていくことを研究主任としてやられていました。協働・探究ということや学びのコミュニティという実践を福井大学附属中学校で作り上げた先生です。そのあと福井の公立の校長先生になって、改めて一緒に探究をさせていただき、何が大事なんだろうという形で話し合った本です。



【これからのリーダーシップである「物語る校長」とは】

牧田先生の素晴らしいところの一つは、先生向けのメッセージであるユニークな校長通信を出されているということです。教育界の新たな動きや流れだけでなく、廊下での生徒や教師との対話や、校内研修で授業をご覧になったりしたことを価値ある意味づけを付け加えて、それを教師たちに配る。牧田先生も驚いていたのは、どうせ捨てられてしまうと思っていたのが、先生たちがファイルして、自分の実践が書かれているとうれしがったり、それを励みにして読んだりしているということです。それが、メッセージとなり、それが「校長が物語る」ということなんだと思います。

また牧田先生は、学校には学校のリズムというものがあられると言われます。研究しなければいけないという義務感だけで研究をやってもうまくいきません。行事で熱くなる時期は行事に全力を尽くす、研究する時は全力で研究するなど、そういうリズムを校長がとらえて、それにあわせながら学校経営をしていくことが大事なんだとよくおっしゃいます。私は外から呼んでいただいて入るだけなので、そういう意味で、校長先生が感じるリズム感は、体感としては持てていないわけです。

また校長先生は、次の先生たちを育てていくという大事な仕事があります。先生たちが、意欲的に学んでいく学びの姿を共有していくことが大切です。牧田先生がこういう通信を書きはじめてから、福井市の中で、5～6人の管理職が、同じような通信を始めています。毎日書いているわけではなく、折りに触れてこんなことを伝えておきたいということが形になって、忙しい先生たちが落ち着いたときに読み返せるということが、今後も大事になると思います。何かを伝えていくという牧田先生の学びの姿勢が共有されていっています。

さらに、牧田先生は聴き上手です。着任1年目は、教頭先生や周りの先生の発言をよく聴いています。時間をかけながら校長としての方針を決定して、徹底させていくという理念をもってリーダーシップを発揮しています。

一最後に、学校や教職員に期待すること、アドバイスををお願いします。

学校の先生の仕事は、これで終わりというところがありません。児童生徒のために、よりよいものをと尽力されている先生が多いです。そこにコロナの問題がふりかかってきて、特に新任の先生や慣れない先生にストレスが大きくかかっているということがわかってきています。教師の仕事はブーメランのように自分がしたことは、必ず戻ってくる仕事です。熱意を持っていろいろな生徒のために考えてやったことはよく戻ってきますし、こんなものと軽く考えてやったことは、どこかで必ず見えてしまうものです。現在、多様な児童生徒が増えている状況があります。そういう中で、ICT等の新たなことも入ってきています。一人で抱え込まずに、チームで、スクラムを組んで仕事をしてほしいと思います。上手にSOSを出して、同僚と一緒に学校を創っていくということが大事だと思っています。子供も大変なので、子供たちも様々な形でSOSを出していることがあると思います。特に、津守眞先生がおっしゃっていた発達の4つの危機という考え方が大切だと思っています。子供は、①自分の存在を十分認められていないと思ったり、②何かしたいと思っ

た能動性を禁じられたり、③自分が相手のことを思ったりやったりしても理解してもらえず、相互理解できなかったり、④本来自分になりたいという自我の欲求をおさえられたときに、問題行動が現れて、自分なりの危機のSOSを出します。それを困った生徒とか、問題だというのではなく、子供自身が困っていると捉える、一緒に声を聴いて考えていくという姿勢が大切だと思います。大勢の子供がいるので一人一人というのはなかなか難しいことはわかります。しかし、そういう姿を見ると、子供は教師を信頼していきますし、信頼関係の中でしか学びは成り立ちません。子供の声を聴くことから生まれる関係をぜひ作っていただきたいと思います。

また、教師生徒のみの関係ではなくて、子供が子供を支える関係を築いていけるのが学校教育のいいところだと思っています。先生ができないところを支えていたり、わからない時もちょっとひそひそと語ったり、「こういうことだよ」と隣の子が言ってくれたりする関係が「わかった」ということにつながると思います。物わりのいい子供は、先生が言ったことすぐにわかるけれども、ゆっくりしかわからない子供は、まわりの子供が手を差しのべてくれるという関係が、学級、学校にできていることで生きていけるし、学んでいけると思います。ケアだけでは人は育たないので、やはり学ぶ対象、新しい世界のことやその知識を得ること、スキルが伸びていくことで自信をもって学ぶことができます。豊かな学びの経験を子供たちに作り出していくことが、教師の使命であり、それは公共の使命だと思っています。今後いろいろな職業が6割とか7割とか変わっていくけれども、絶対消えないのは、教師だと言われています。ぜひがんばって…。いや、がんばってではないかもしれないですね。先生方はその先生らしく、子供のその子供らしさを認めて、力を発揮して下さったらいいなと思います。



【職業で絶対消えないのは教師。
教師の使命、公共の使命。】